

白石女子高等学校 99年の沿革		
1911	明治44	町立白石実科高等女学校として創立
1918	大正7	郡立白石実科高等女学校と改称
1920	9	郡立白石高等女学校に昇格
1921	10	宮城県白石高等女学校と改称
1922	11	寄宿舎開設
1948	昭和23	4月、新学制に伴い宮城県白石女子高等学校と改称(3年制、1学年5学級、定員750人)
1957	32	寄宿舎を閉鎖し銀杏寮と改称。以後、作法室として使用
1959	34	第1体育館落成。校庭拡張
1966	41	山小屋「しゃくなげ荘」完成
1967	42	衛生看護科新設、准看護婦養成施設に指定(1学年1学級) 7月、水泳プール竣工式
1969	44	新校舎全面完成
1970	45	生徒会館(創立60周年記念)完成
1980	55	定時制課程募集停止
1981	56	銀杏寮解体
1983	58	定時制課程閉校記念式典挙行
1991	平成3	銀杏会館(創立80周年記念会館)完成
1996	8	蔵王分校が宮城県蔵王高等学校として独立
2002	14	看護科新設、看護師養成施設に指定。10月、山小屋「しゃくなげ荘」解体
2005	17	専攻科看護科第1回生入学(2年制、1学年定員40人)



2



4

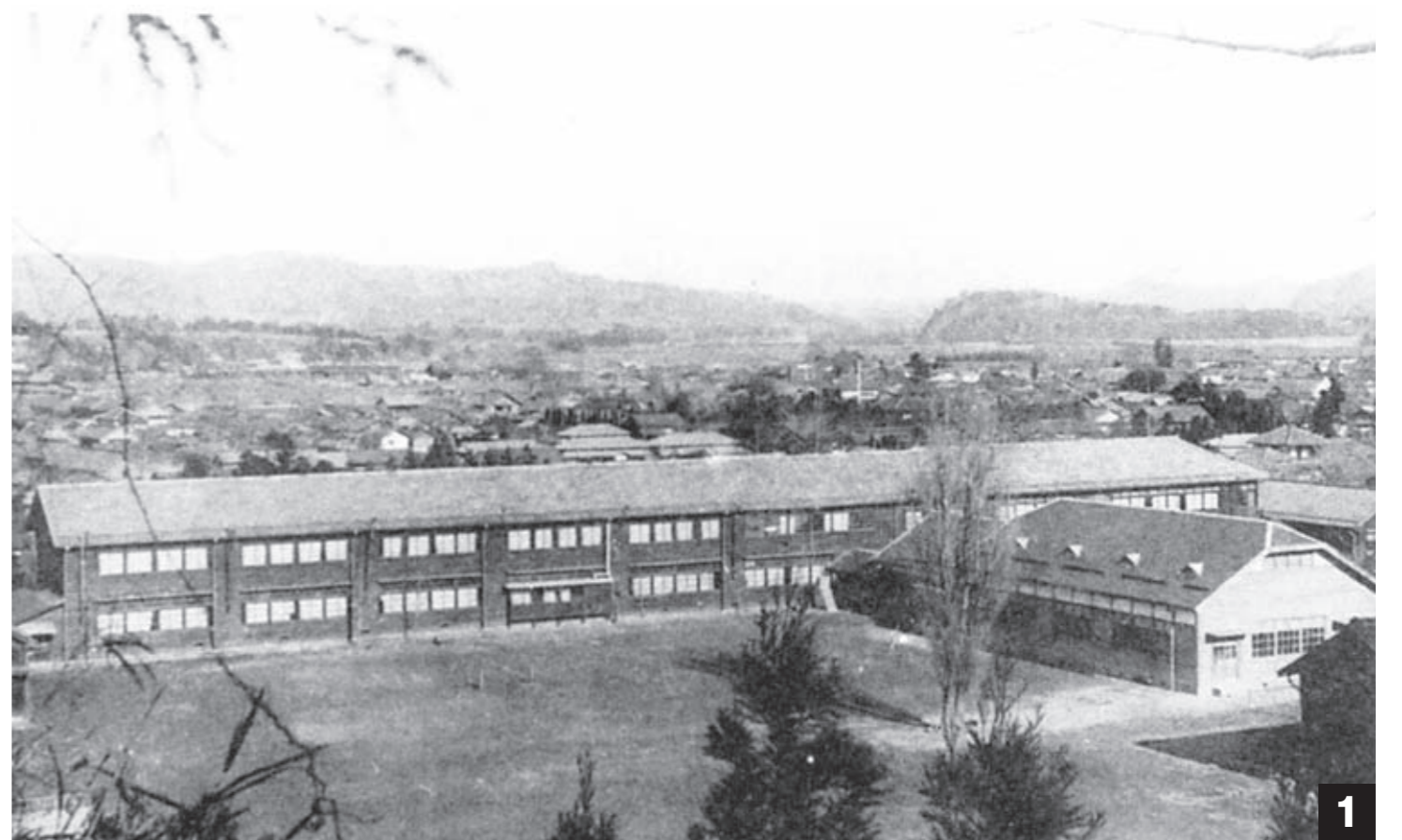


3



5

■昭和9(1934)年当時の校舎全景・写真右側が講堂兼体育館 2昭和45(1970)年の白女高祭後夜祭でのキャンドルサービス「乙女の誓い」 3創立者であり、初代校長も務めた川田百人氏 4大正9(1920)年、新築になった二階建校舎正面玄関と校木の連理の榎 5白女の校歌であり白女の魂である一文(伊藤廣毅氏書)(資料提供:宮城県白石女子高等学校)



1



宮城県白石女子高等学校

白女99年「明るく、強く、^{うる}美しく」
その思いは新生白石高校でも変わらない

はじまり—実科高等女学校の創立

明治44(1911)年9月28日、白石町立白石実科高等女学校が創立された。ここから白石女子高等学校の歴史が始まる。当時、白石第二尋常高等小学校長であった川田百人氏は、高等小学校に付属していた2年制の補習科を分離独立させ、「白石町立白石実科高等女学校」としたのである。

大正7(1918)年4月、町が2つの小学校を維持することは経済的に負担が大きいため、理由から、高等女学校の校地や校舎を借用していた白石第二尋常高等小学校が、白石第一尋常高等小学校に統合されることになった。

このとき、高等女学校も廃止するべきという声が高かったが、初代校長の川田氏と、白石高等学校の前身である刈田中学講習会を創立した巨理晋氏(3ペー ジ写真4)の努力と奔走により、経営や管理を郡に移管し「刈田郡立実科高等女学校」とすることで廃止を免れたのである。

大正9(1920)年4月には、刈田郡立白石高等女学校、そして翌年4月からは、念願かなって宮城県白石高等女学校となったのである。

戦後—新たな出発—新制高校

昭和23(1948)年4月1日、県内36校の県立高等学校のひとつとして、3年制、定員750人の宮城県白石女子高等学校が新たな出発をした。

女子教育の戦後改革は、男女性差別が否定されて、男女にかかわらず教育の機会均等が実現したことであり、言えるだろう。学校に残る記録では、昭和30(1955)年6月に全生徒に新制服の説明をしたとある。これ以降、検討を進め昭和32(1957)年に新制服が決定、昭和33(1958)年度入学生から、全員着用することとなった。その制服が本年3月までの52年間、着用された制服である。

昭和38(1963)年、全日制課程の普通科が1学年5クラスから7クラスに増加した。また、昭和42(1967)年からは「衛生看護科」が新設され、文部省(現在の文部科学省)より准看護婦を養成する学校として指定された。

このため、昭和38年から昭和44(1969)年まで、すべての校舎を鉄筋コンクリートで新築する工事が行われた。6年間にわたる長期工事のため、一時期には白石工業高校の教室を借

白石女子高等学校校歌

(昭和26年制定)
作詞 白鳥 省吾
作曲 信時 潔

一、白石川の水清く
不忘山の永劫の雪
み空に匂ふふるさとに
文化の光輝けて
輝き立てる学び舎よ

二、見よ益岡の桜花
陣場の松に照り映ゆる
緑の春を門出とし
朝な夕なに励むとき
喜びの声こだませり

三、新しい世のあけはほの
若き胸揺る鐘の音
真理の泉波む幸の
明るく強く美しく
大地を踏みていざ行かん

白石高等女学校校歌

(昭和11年制定)
作歌 小倉 博
作曲 細川 碧

一、書よ窓のしづけさに 音もさやく傳ひくる
白石川の流水の きのふの淵はけふの瀬と
かはれど霞むまもなく 進みゆく世におくれじと
おもひきためつすぢに

二、名に高かりし城のあと 今もおもひで益岡の
春は木ごとに花にほひ 秋は紅葉のしきおる
おのづかなる天地の すがたに深きあはれ知る
心やしなへをりふにし

三、日ごとに對ふ忘れずの 山はうき世のならひと
時に黒雲たまよひ 雨風いたくあるれども
いはほの根ざし堅くして 揺らぐこゝなきふしは
あらばやわれちをみなにも

用して授業を行うなど、教室不足の対応に負われた。昭和44年には、すべての校舎が完成した。このとき、大正11(1922)年県立高等女学校時代に建てられた「講堂兼雨天体操場」が、昭和45(1970)年に一部解体されたものの、歴史の面影を残す唯一の建物となっていた。平成3(1991)年に生徒研修棟が建設されることになり、解体もやむを得ずとなったが、同窓生を中心に保存しようという声が高まり、改装と移転を行い同年3月に「卓球場」と命名され、平成22年の統合まで使用された。

白女の魂—「明るく、強く、美しく」

白女最後の校長を務めた須藤亨先生は、創立99年誌に、「白女が歩んできた99年という道のりは、単なる時間の流れではない。自らの人生を探し求めながら母校の未来を思いやり過ごした、2万5千人を超える卒業生と教職員の『生命の道』であったことを確信している」と記した。白女の歴史は99年で歩みを止めたが、校歌にある通り「明るく、強く、美しく」の白女の魂を新生高校へと引き継ぎ、これからも「生命の道」として歩み続けていく。